音韻現象の ABA 分布をめぐる解釈の方法とその実際
—チベット文化圏南東端のチベット系諸言語を例に—

鈴木 博之
オスロ大学

キーワード：カムチベット語、香格里拉方言群、地理言語学、音変化、ABA 分布

1　はじめに

地理言語学的な研究において、ある言語現象が複数の言語・方言間で ABA 分布（周圏分布）を示しているとき、当該言語・方言の系統的関係にかかわらず、この現象の間に一定の歴史的な変化もしくは伝播が存在すると解釈する[1]。地理言語学の分析対象は、多くが語彙形式であり、音形式については、たとえ ABA 分布を示しているとしても、あまり注目されていない。音対応は方言分類を行うときに重要な指標となることが多いものの、音韻変化それ自体は自律的に起こりうる性格のものであると理解されているからであろう。

チベット系諸言語[2]について見ると、方言研究の蓄積は豊富である（金鵬　主編 1983、西 1986、瞿靄堂 1990、格桑居冕・格桑央京 2002、江荻 2002、張濟川 1993, 2009 など）が、地理言語学的研究は進んでいるという状況にはない（鈴木 2015b, 2016a）。筆者による東チベット地域を中心とする地理言語学的研究においても、多くは語彙形式を取り上げてきた[3]。その中で鈴木 (2016b) は、中国雲南省迪慶藏族自治州香格里拉市で話されるカムチベット語の一部が、音形式について ABA 分布の状態を示していることを、具体例と言語地図によって例示している。もちろん、同論文が扱う範囲内で生じている言語現象については、この説明が成立していることは確かである。しかしながら、同論文が解決しているのは、当該地域の範囲に含まれる言語の音変化の過程が ABA 分布の定義通りに分布し、逆周圏分布ではないことに限られており、ABA 分布が成立しているのかそのように見えるだけなのかといった根本的な疑問が残されている。言語地図の作成範囲を指定する理論的根拠は存在しないため、言語地図に採録された範囲の外側に分布する言語の状況がいかなるものであるかという疑問が常に残る。

本稿では、鈴木 (2016b) の議論および結論について、扱う範囲を雲南省で話されるカムチベッ

[1] ある点を中心に同心円状に分布する現象について、外側を古い形式、中心部を新しい形式と考える。地理言語学の一般的な方法論については、柴田 (1969) を参照。

[2] チベット系諸言語は ‘Tibetic languages’ の訳で、従来の「チベット語方言 Tibetan dialects」に代わる概念である。詳細は Tournadre (2014)、Tournadre & Suzuki (forthcoming) を参照。現在のところ、雲南で話されている土地のチベット系言語はカムチベット語のみである。

[3] たとえば、鈴木 (2007, 2008b, 2014c)、Suzuki (2009, 2012b, 2013, 2014, 2015, 2016ab, 2017ab)、Suzuki & Sonam Wangmo (2016) など。

ト語全体まで拡張し、地理言語学の方法論に基づいて、次の２点を検証する。

1. 対象とする言語現象が見せる ABA 分布の外側が、当該 ABA 分布の範囲外にあること
2. ABA 分布となる現象が、ABA 分布外から受けた影響によって成立していないこと

地理言語学は通常方言区画の議論と一線を画する（大西 2014）が、カムチベット語のように方言区画が明確でなく、また方言話者の歴史も文献に詳細な記載がないような場合[4]、音形式の ABA 分布が成立するという事実は方言区画を考えるうえでの重要な根拠となりうる。

本稿では、まず雲南省で話されるカムチベット語の筆者の方言調査地点の概要と先行研究の概観を示す。続いて、上述の２点について、それぞれ１節を当てて議論する。なお、本稿で用いる言語データは断りのない限り筆者自身が収集したものである。音形式の表記には音声記号を用い、表記の枠組みは鈴木 (2005)、朱曉農 (2010)、Suzuki (2016c) に従う。また、本稿で掲げる地図は注記しない限り ArcGIS online を用いて描画したものである。

2　雲南のカムチベット語の概観と先行研究

まず、雲南のカムチベット語方言に関する先行研究を整理しておきたい。Zhang (1996) には、1950 年代に行われた少数民族言語の一斉調査の際に行われたチベット系諸言語の分布地点とみなせる一覧が提示されており、それによると、６地点の変種が記録されたと考えられる。その名称とそれに相当する現在の行政区分名を掲げる[5]。

- 中甸：迪慶州香格里拉市建塘鎮
- 東旺：迪慶州香格里拉市東旺郷
- 徳欽：迪慶州徳欽県升平鎮
- 奔子欄：迪慶州徳欽県奔子欄郷
- 塔城：迪慶州維西県塔城鎮
- 大坡崗：迪慶州徳欽県奔子欄郷打撲貢村

ただし、これまでに行われた記述研究については大部分が建塘鎮に属する方言に集中し、それ以外についてはあまり記述がないという点も指摘できる。建塘鎮で話される変種の先行研究には、陸紹尊 (1990)、Hongladarom (1996)、Wang (1996)、《中甸県誌》(1997:147-153)、《雲南省誌》(1998:421-441)、《迪慶藏族自治州誌》(2001:1281-1293)、蘇郎甲楚 (2007)、王曉松 (2008) 、趙金燦 (2010)、趙金燦・李玉朋 (2014) のようなものがあげられる。また、このため、建塘鎮の変種が雲南チベット語を代表すると広く認識されているが、実際はそうであるとは言えない（鈴木 2008a）。また、これらの方言についての比較的まとまった記述文法はいくつか提出されており、吹亞頂方言を扱う鈴木 (2014a)、勺洛方言を扱う鈴木 (2011)、斯嘎方言を扱う鈴木 (2012a)、そして彭丁方言を扱う Bartee (2007) などがあげられる。これらを見渡すと、各種方言間の全般

[4] 地理言語学における言語現象の解釈には、歴史史料を参考にすることが多い。逆に言えば、歴史史料が存在しない場合、複数の可能性がある解釈の中からより適切なものを選ぶのは困難になる。

[5] 本稿では、地点・方言名をすべて漢字で表記する。

的な文法的特徴は類似の類型をもっているものの、細かい点では際立つ異なりが認められる。たとえば、チベット系諸言語を特徴づける文法的カテゴリーに証拠性 (evidentiality) というものがある（Tournadre & LaPolla 2014）が、Hongladarom (2007) と Suzuki (2012a, 2017c) はともに雲南で話される方言を記述しているけれども、異なりが大きい。

次に、筆者の調査に基づいた雲南北西部で話されるカムチベット語の分布の様子を提示する[6]。図１は雲南省北西部のカムチベット語分布地点について、筆者が現地調査を行って方言資料を収集した地点の一部を示している。

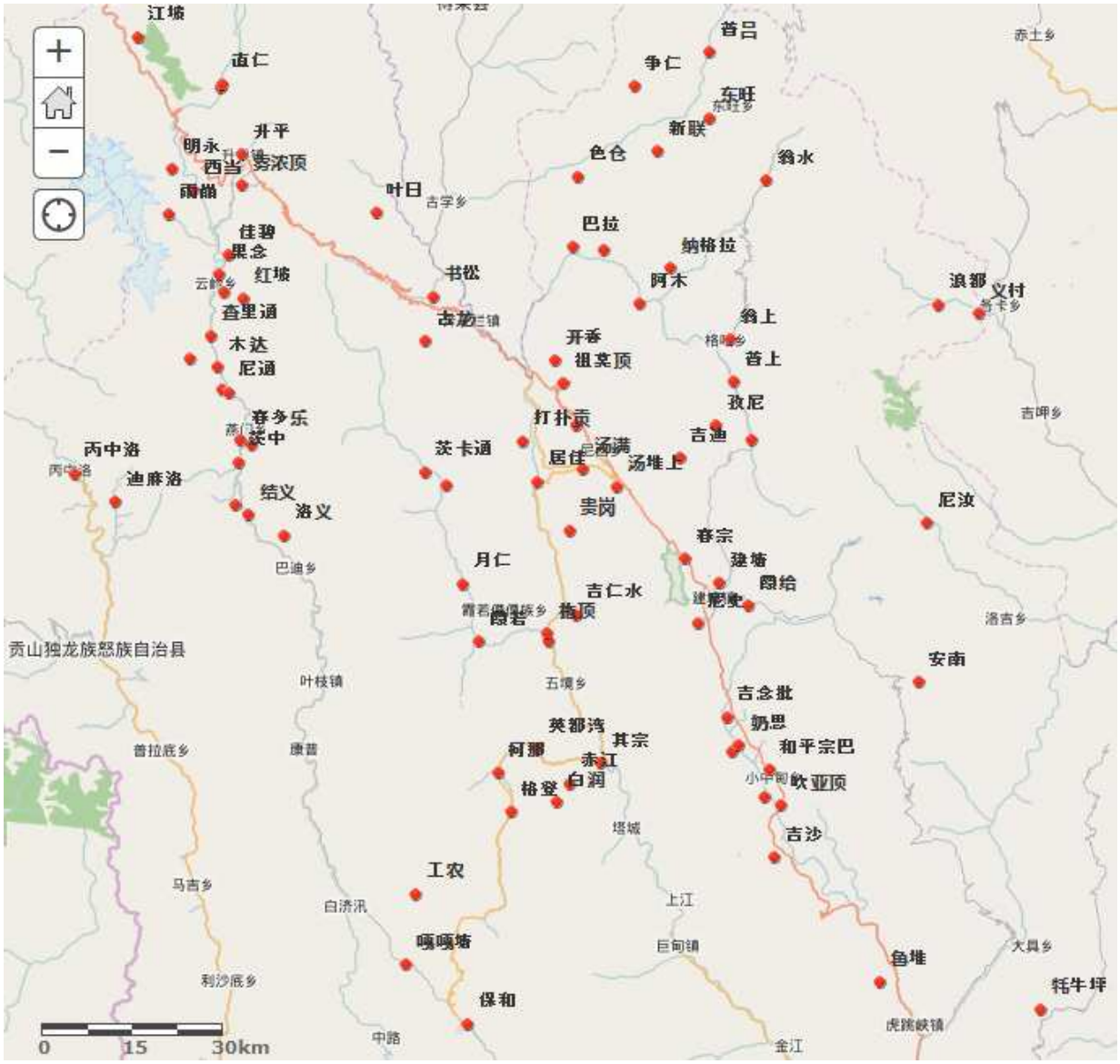

図１　雲南省北西部のカムチベット語分布地点

これらは地理言語学の研究を視野に入れた、自然村を単位とする方言調査の地点である。しかしながら、そもそも図１の調査地点は地理言語学的研究を行うことを目的として記述された

[6] 詳細な地点情報は本文末の付録を参照。

地点ではなく、地点の選定に理論的根拠があるわけではない。当初思い描いていたのは、行政村単位での調査であるが、それでは記述しきれない方言差が見込まれるようになったため、自然村単位での調査に切り替えている。この調査方法は、現在雲南省のチベット系諸言語にのみ、段階的に適用されている[7]。このため、今後も調査地点は増加することが見込まれる。

この地域に分布するカムチベット語に関して、鈴木 (2015a) は次のような分類を提示している[8]。

1. 香格里拉方言群
   （a）建塘 [rGyal-thang] 下位方言群
   （b）雲嶺山脈東部下位方言群
   （c）維西塔城 [mTha’-chu] 下位方言群
   （d）翁上 [dNgo] 下位方言群
   （e）浪都 [La-mdo] 下位方言群
2. 得榮德欽 [sDe-rong ’Jol] 方言群
   （a）雲嶺山脈西部下位方言群
   （b）奔子欄 [sPom-rtse-rag] 下位方言群
   （c）羊拉 [gYag-rwa] 下位方言群
   （d）丙中洛 [Bod-grong] 下位方言群
   （e）巴拉 [’Ba’-lhag] 下位方言群
3. 郷城 [Cha-phreng] 方言群
   （a）東旺 [gTor-ba-rong] 下位方言群

以上の分類を地図上の地点に反映させたものを図２として掲げる。この分類は雲南省に分布するものだけにしぼった記述であり、地理的に連続する雲南省外の方言については含まれていないことに注意が必要である[9]。なお、本稿では以上に示した分類に用いられる 1-3 の番号と a-e の下位分類記号を、方言分類に言及する場合に一貫して参照する。

上記の分類と、本節冒頭に掲げた中国側の調査研究の地点を対照すると、中甸（1a）、東旺（3a）、徳欽（2a）、奔子欄（2b）、塔城（1c）、大坡崗（1b）となる。すなわち、中国側の調査研究ではただ６地点のみが記録されたが、それぞれ鈴木 (2015a) の枠組みに照らしてみれば、上に示したように、異なる群に属していることが明らかであるから、結果的には雲南のチベット系諸言語の多様性を反映するような調査が行われたといえる。なお、これら６地点はすべて図１に示された地点にも含まれている。なお、1950 年代の調査記録と現代の調査記録の間には、表

[7] 他の地域では行政村単位はおろか、郷鎮単位での調査も不十分である。

[8] 鈴木 (2015a) のうち、香格里拉方言群については、鈴木 (2016b) で若干の修正が適用されている。以下に記述するのは、2017 年３月現在の研究を踏まえたものである。

[9] たとえば、郷城方言群の分布地域の中心は、香格里拉市に北接する郷城県内（四川省）にある。雲南省内で話されているのは、(3a) のみである。また、これらの方言群の中には、過去にある程度の話者集団を形成して移民したグループがあり、地理的に不連続な地域にも同一の方言群に属する方言が認められる。本稿では、これらについても取り上げない。

記法の異なりはあるとしても、それぞれの地点について同一の方言群に属している方言であると解釈できる。すなわち、直近の 60 年間に話者の大規模な移住及び言語転換は、言語現象からは想定されない。

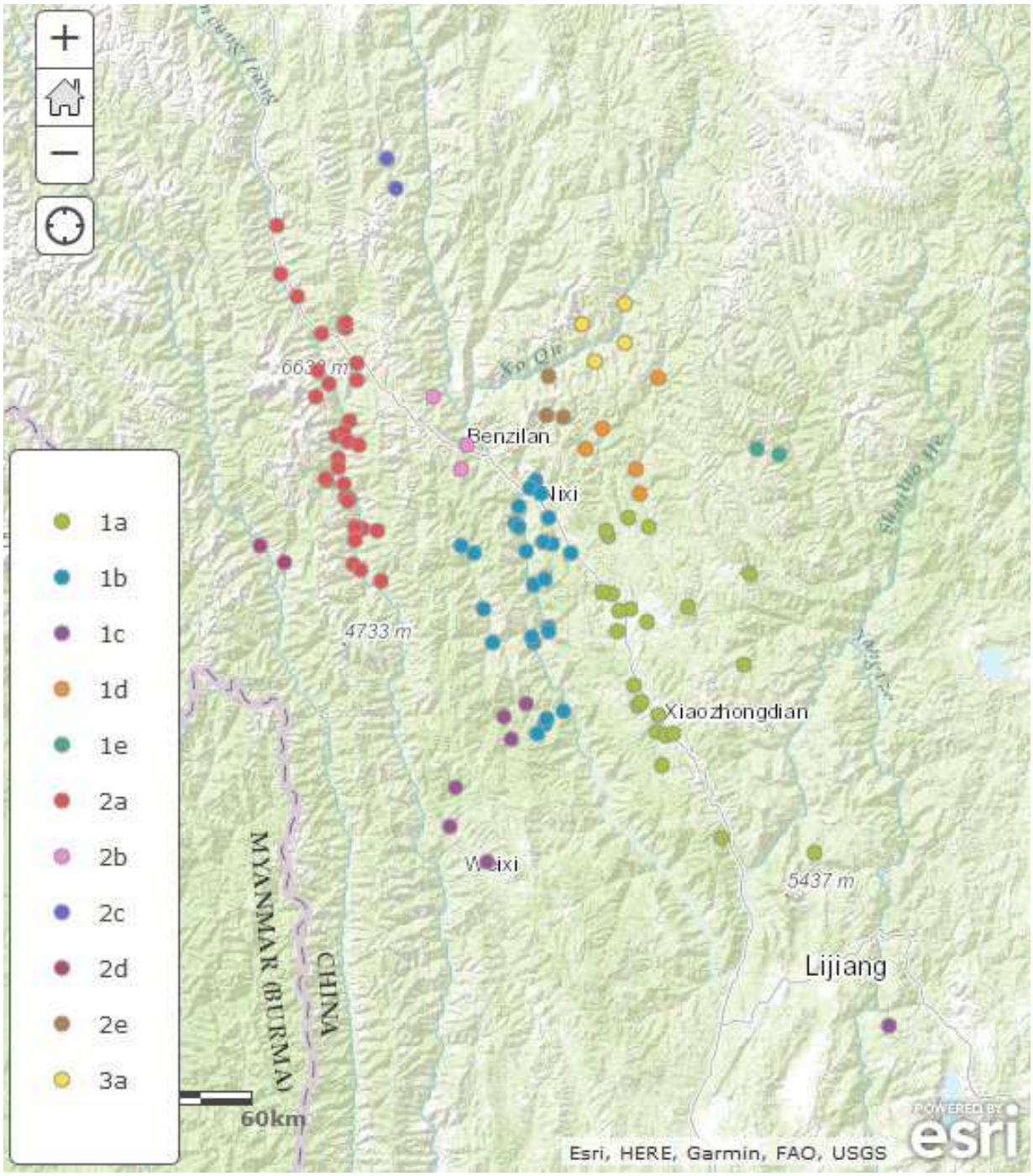

図 2　雲南省のカムチベット語の方言分類

ひとくちに雲南のカムチベット語といっても非常に地域差の激しいものであり、《迪慶藏族自治州誌》(2001:1281)、《迪慶藏族自治州民族誌》(2001) などの総合的な記述には地域差について言及があるものの、具体的な言語学上の特徴については、図 1 に示したように全体的に取り上

げてみて初めて具体像が理解できるようになった。本稿では、この研究の過程で明らかとなった、ABA 分布を示す音特徴について、地域的差異が最も大きく認められる特徴を取り上げ、現象の解釈に関する議論を行う。

なお、本稿の地図に反映される地点数は最大で 108 地点である。

3　音特徴の分類の視覚化：ABA 分布を示す地域の切り出し

前節に述べた通り、先行研究に従えば雲南のカムチベット語の変種は主に３つの方言群に分類されることが分かっている。鈴木 (2015a) の議論の基盤は、最も早い段階で鈴木 (2008a) に提示されている。それによると、方言分類は音特徴に基づいて行われていることが分かる。チベット系諸言語の分類については、瞿靄堂・金效静 (1981)、西 (1986)、西田 (1987) などで議論され、音声現象に関する共通の改新に基づく分類が最も説得力があると考えられている。しかしながら、鈴木 (2015b, 2016a) も指摘するように、共通の改新と類型的特徴の類似に関する区別への理解が乏しい先行研究が多いのも事実である[10]。本稿ではこの問題については議論せず、議論の対象となる地域の諸方言に特化した音声現象に関する共通の改新を具体例とともに提示し、それに基づき議論を進める。

本節では、雲南のカムチベット語について、言語地図を提示することによって、鈴木 (2015a) のいう３つの方言群が際立つ音特徴の違いを示すかという問題について考察する。具体的な分析は言語地図上の記号に反映させるように工夫している[11]。本稿の主たる議論は ABA 分布を示す事例の解釈方法であり、雲南のカムチベット語の類型とその分布を示すことではない。したがって本節では、ABA 分布を示す方言群を切り出せるかどうかという点についての簡潔な議論にとどめることにする。

3.1　地図化する音特徴

本稿で議論を展開するにあたり、地図を用いて方言差異を視覚化するのに適するのは、扱う方言の間に一定の差異が認められるものに限定される。もちろん方言差異がないことを示すために地図を作成したり[12]、既定の基準に従って差異の有無にかかわらず地図を作成したりすること[13]はありうる。しかし、これらは本稿の議論の目的とは異なるため、取り上げない。

雲南のカムチベット語諸方言の音対応について、歴史的視点から最も際立つ音特徴は前部硬

---

[10] これに関する具体的な問題点、およびチベット系諸言語全体を対象にした分類方法については、Tournadre (2014) を参照。

[11] 地理言語学で用いる言語地図は、地図上に配される記号（はんこ）によって、対象言語の類型や歴史が把握できるようにすることが理想的である。本節で掲げる図を特徴づけるため、前節に示した図２において方言所属の異なりを単に色で表現している。

[12] 鈴木 (2007), Suzuki (2012b) による「ぶた」のチベット系諸言語の語形式を扱った事例が該当する。これと対照的になっているのが、「子ぶた」の語彙形式で、語形式が非常に多様である。

[13] たとえば Shirai et al. (2015), Suzuki et al. (2016), Ebihara et al. (2016), Iwasa et al. (2017), Kurabe et al. (2017ab) などは Studies in Asian Geolinguistics という東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で行われている共同研究の成果である。扱うテーマによって、差異が多様なものと比較的安定しているものなど、テーマ間に差が認められる。

口蓋系列と硬口蓋系列についての蔵文との音対応である。この点について鈴木 (2016b) が詳しい議論をし、４種類の蔵文対応形式を総合的に見ることで方言を分類することが可能であるとした。この４種類とは、次のようである[14]。

- 蔵文 Ky 対応形式[15]
- 蔵文 Kr 対応形式[16]
- 蔵文 Py 対応形式[17]
- 蔵文 Pr 対応形式[18]

これらを総合的に見ることで、鈴木 (2016b) の扱う範囲の方言群（1a, 1b）には次の４つの類型があると結論づけている[19]。

表１：香格里拉方言群（1a, 1b）における蔵文形式と口語形式との対応関係

<table>
<tr><th></th><th>蔵文 Ky</th><th>蔵文 Kr</th><th>蔵文 Pr</th><th>蔵文 Py</th></tr>
<tr><td>第１類</td><td rowspan="2">/tɕʰ, tɕ, dʑ/</td><td rowspan="2">/cʰ, c, ɟ/</td><td>/çʰ, ç, ʝ/</td><td>/ɕʰ, ɕ, ʑ/</td></tr>
<tr><td>第２類 A</td><td colspan="2">/ɕʰ, ɕ, ʑ/</td></tr>
<tr><td>第２類 B</td><td colspan="2">/tɕʰ, tɕ, dʑ/</td><td>/çʰ, ç, ʝ/</td><td>/ɕʰ, ɕ, ʑ/</td></tr>
<tr><td>第３類</td><td colspan="2">/tɕʰ, tɕ, dʑ/</td><td colspan="2">/ɕʰ, ɕ, ʑ/</td></tr>
</table>

ところが、表１から分かるように、４種の音対応のうち蔵文 Ky 対応形式と蔵文 Py 対応形式は方言間で差異を示していない。このため、雲南のカムチベット語についてこの２つを地図化しても一様な分布を示すにとどまることになる。もちろん、先行研究のいう「総合的に見ること」とは、個別の音対応だけに注目するのではなく、複数の特徴の合流と対立の維持についても考慮に入れる必要があることについて述べているのであるが、表１については、すでに合流と対立の維持について既知のことであり、言語地図も鈴木 (2016b) に提示してあるため、あえて本稿では個別の音対応に注目し、蔵文 Kr 対応形式および蔵文 Pr 対応形式の２点につき、地図を作成する。

もちろん、以上に言及した蔵文対応形式以外にも特徴的な差異が認められるけれども、これらについては、先行研究におけるチベット系諸言語の方言学的研究における記述[20]や、また個別方言の記述を参照されたい[21]。

---

[14] ただし、各方言によって例外もしくは下位区分を設ける必要がある。なお、チベット文字の表す音価については、格桑居冕・格桑央京 (2004) を参照。

[15] 蔵文 k, kh, g に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式を指す。

[16] 蔵文 k, kh, g に足字 r を伴う形式を含む全ての対応形式を指す。

[17] 蔵文 p, ph, b に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式を指す。

[18] 蔵文 p, ph, b に足字 r を伴う形式を含む全ての対応形式を指す。

[19] 鈴木 (2016b:100) の表を一部改変して掲げる。

[20] 江荻 (2002) や張濟川 (2009) を参照。

[21] 雲南のカムチベット語については、鈴木 (2013ab, 2014b, 2016c, 2017)、Suzuki (2008, 2009, 2014) などの議論がある。

3.2　言語地図と考察

以下に蔵文 Kr 対応形式および蔵文 Pr 対応形式の言語地図を掲げる。

まず蔵文 Kr 対応形式について地図化する（図３）。蔵文 Kr 対応形式は、具体的に *khrag*「血」、*skra*「髪」、*gro*「小麦」などの初頭子音に現れる音を想定する。

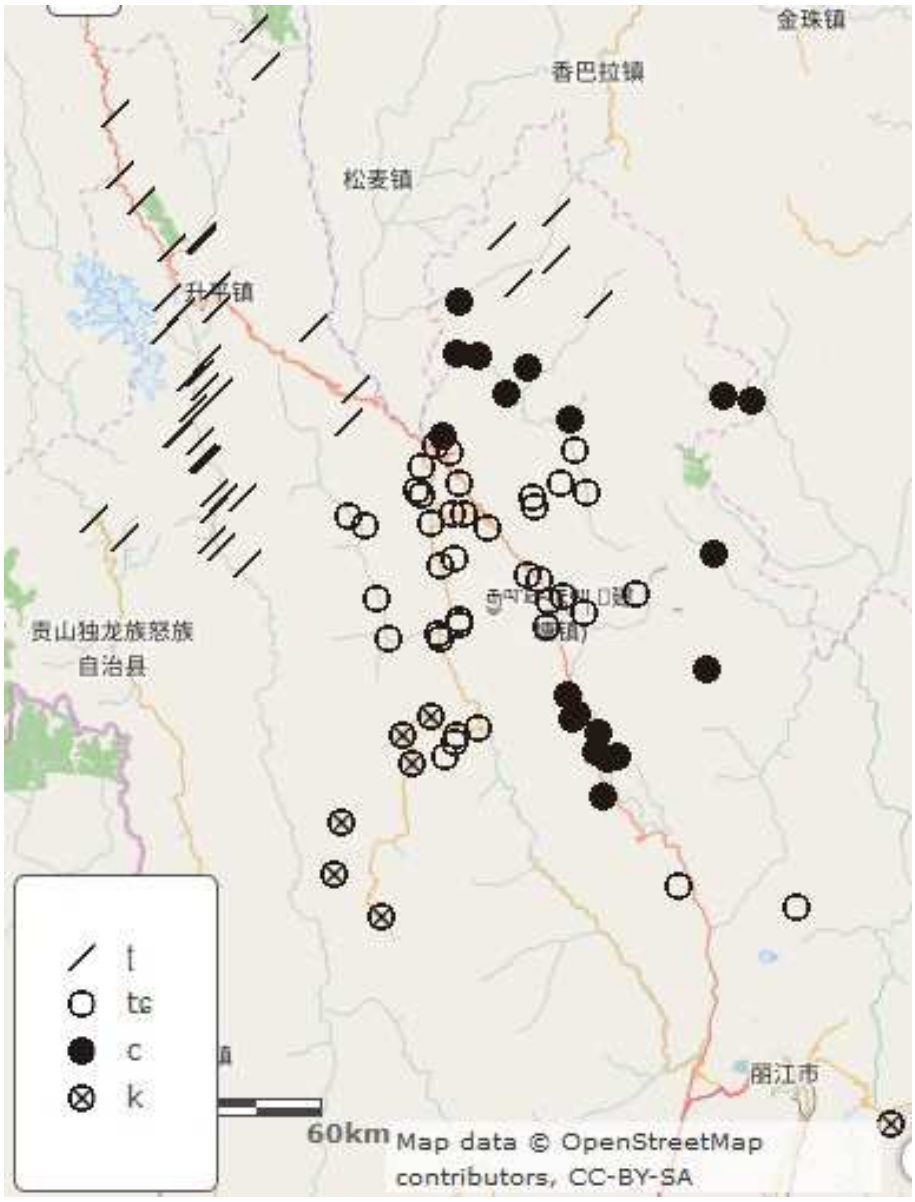

図３　蔵文 Kr 対応形式（簡略表記）

凡例中の ‘ʈ’ はそり舌閉鎖音及びそり舌破擦音の両方を含む。‘c’ には硬口蓋閉鎖音及び硬口蓋化軟口蓋閉鎖音の両方を含む。いずれにせよ、地図化するにあたっては単純化した。

図３上の記号に反映されているように、この地域には２つの大きな類型がある。これらは斜線と円形の記号に分けて示している。言語地図には分析の最終結果のみが反映されるため、どの音特徴が斜線に分類されるか円形に分類されるかについて、地図それ自体が解釈を示すことは

ない。異なる円形の記号が互いに関連するといえるのは、たとえば鈴木 (2016b) や鈴木 (2013a) などの個別的、具体的研究に基づく判断となる。この部分の議論は本稿の目的との関係が希薄であるため、割愛する。

次に蔵文 Pr 対応形式について地図化する（図４）。蔵文 Pr 対応形式は、具体的に *phra*「細い」、*sprin*「雲」、*brag*「崖」などの初頭子音に現れる音を想定する。

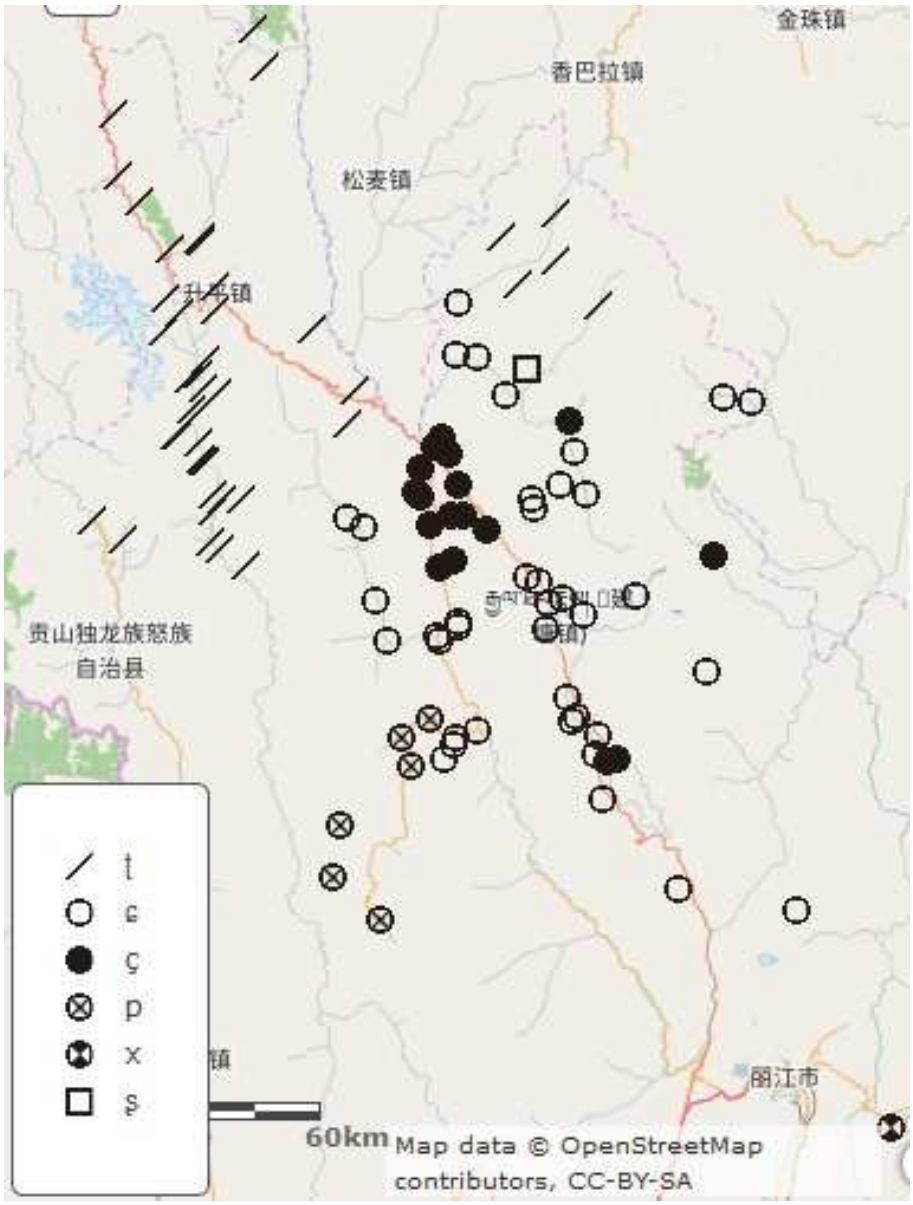

図４　蔵文 Pr 対応形式（簡略表記）

凡例中の ‘ʈ’ はそり舌閉鎖音及びそり舌破擦音の両方を含む。

図４上の記号も、図３と同じく分布の面で２つの大きな類型がある。これらもまた斜線と円形の記号に分けて示している。これらに加えて、図４には四角の記号で示された形式もある。図３と図４に用いられた音対応を表す記号は、調音位置の点において互いに関連している。両図の斜線記号はそり舌閉鎖/破擦音を示し、円形記号は主に口蓋音に関連づけられている。

図３、図４のデータを総合してみると、２つともにほとんどの地点が斜線と円形の２種に分かれ、ほとんどの地点で記号の形態が一致している。表１に示したように、地図化した２つの蔵文形式は互いに関連しており、これらが関連づけられないという結果が出れば、それは従来のチベット系諸言語の研究[22]上まれな事例であるといえるから、図３と図４が示す結果はチベット系諸言語の方言研究としてある程度期待される帰結であるといえる。ここで問題にすべきは、斜線と円形になぜ分かちうるかという点である。言い換えれば、ここでなされるべき説明は、これら２種が音変化の過程で交差しないという事実である。

斜線で示される地点の諸方言については、表１に含まれていない。このため、これらの方言が示す音対応を、表１にならって以下にまとめてみる。

表２：得榮徳欽方言群（2a）における蔵文形式と口語形式との対応関係

	蔵文 Ky	蔵文 Kr	蔵文 Pr	蔵文 Py
X 類	/tɕ^{h}, tɕ, dʑ/	/ʈ^{h}, ʈ, ɖ/		/ɕ^{h}, ɕ, ʑ/
Y 類	/tɕ^{h}, tɕ, dʑ/	/ʈ^{h}, ʈ, ɖ/		/ʂ^{h}, ʂ, ʐ/

表２に示されるように、得榮徳欽方言群（2a）に属する諸方言は、香格里拉方言群に属する諸言語と異なり、これら４種の蔵文対応形式について、際立つ異なりが認められない。X 類と Y 類の根本的な異なりは、ただ蔵文 Py の音対応における調音位置において示されるにとどまる。また、蔵文足字が y か r かによって音対応が分かれ、後者の場合一律そり舌閉鎖音に対応する点が特徴的である。

表１と表２を比べれば分かるように、これらは４つの蔵文対応形式間の音対応の相互的関係について、まったく異なる類型を示している。そして、表１は蔵文 Ky と蔵文 Kr、蔵文 Pr と蔵文 Py という蔵文基字に基づく２つのグループに分かれ、表２は蔵文 Ky と蔵文 Py、蔵文 Kr と蔵文 Pr という蔵文足字に基づく２つのグループに分かれている。この異なりは個別の音対応ではなく、体系全体における音対応の類型の異なりを意味する。そしてそれに基づいて、図３、図４における円形と斜線記号で示される方言が異なる類型をもつ方言群であると判断できるいうことである。

もちろん、以上の説明では円形もしくは斜線で示してある方言群が内部でひとまとまりになっているかどうかは説明できない。事実、斜線で示してある地点の方言は、得榮徳欽方言群 (2) および郷城方言群 (3) に属するすべての方言が含まれている[23]。しかしながら、本節の目的は円形で示された方言群を切り出すことであるから、以上の点を説明する必要性は現段階ではないということに注意が必要である[24]。本節の議論は表１と表２に示される音対応の類型が互いに異なっていることを示すことができていれば十分である。

[22] たとえば江荻 (2002)、張濟川 (2009) などを参照。

[23] これは江荻 (2002) などを参照すれば分かるように、多くのチベット系諸言語で認められる音対応であるといえる。

[24] しかしながら、得榮徳欽方言群 (2) と郷城方言群 (3) がどのように分かれるのかを詳細に議論した研究は未見である。両方言群の特徴を兼ね備えた方言、巴拉方言 (2e) もまた存在する（鈴木 2012b）ため、十分な方言地点数を確保して議論をする必要がある。

4　ABA 分布を示す香格里拉方言群の解釈

前節の議論において、香格里拉市を中心とする地域に分布する方言と徳欽県および香格里拉市北部に分布する方言の間には音変化の側面で異なる音変化の過程を経て成立していることを示した。一方、後者の方言については方言間に認められる音対応が一様であることが分かるが、前者については複数の音対応が存在していることが分かる。しかも、その分布は香格里拉市建塘鎮を中心とする地域を中心に同心円状の分布を示し、地理言語学でいうところの ABA 分布に近い状態を呈している。しかし、これは音韻特徴であって、語形式ではない。

地理言語学においては、ABA 分布は主に語形式や形態論的、形態音韻論的現象の解釈に用いられることが多い（有元 2014 参照）。音変化については例外が比較的多く、ABA 分布が成立していると判断するのに躊躇する例が多く認められるといえる。しかしながら、音変化の ABA 分布は、特定の地域と言語状況においては成立しうるのではないかと解釈できるということを、本節で考察する。

4.1　考慮すべき音韻特徴の範囲とその背景

前節で掲げた４つの蔵文形式に関する香格里拉方言群の事例（表１）について、鈴木 (2016b) は第１類が最も古態的であり、第３類が最も変化の進んだものであると分析する。加えて、第２類の音変化の類型に２種類ある点について、それが香格里拉方言群の中において下位分類を設けられる１つの言語学的根拠になると考えている。

しかしながら、図３、図４に示した円形記号は、表１には含まれない音対応を示しているものも存在する。より単純な事例を示す図３について見ると、音対応として ‘k’ と書かれた分類が相当する。この対応関係を持つ方言は維西塔城下位方言群（1c）に分類される方言であるが、鈴木 (2013a) に記述されるように、この音変化が起きた背景にナシ（納西）語との接触という外的要因を認めることができる。この点において、維西塔城下位方言群は音変化の歴史について明確な分類基準が認められるということになる。歴史的発展が明らかであり、建塘下位方言群 (1a) や雲嶺山脈東部下位方言群 (1b) との一定の距離が認められる以上、この種の方言は本稿で考察する ABA 分布の外側に位置すると考える。

加えて、もう１つの問題がある。それは香格里拉方言群に属さないいくつかの方言が、図３、図４ともに香格里拉方言群（1）と同様の特徴を示していることにある。それは巴拉、色倉の２地点であり、両者とも (2e) に属する。これらは歴史言語学的分析によって所属が議論されており、（鈴木 2012b）、当該の音変化は香格里拉方言群（1）の影響を受けて成立したと見込まれる。これは ABA 分布が系統関係を越えて成立している好例であり、地理言語学的分析によって明らかになる特徴である。しかしながら、本節の議論では、１つの系統に属すると認められる方言の音特徴とその変化の順序について考察することを目的とするため、(2c) の点を言語地図に組み込まない。

さて、以下に図３、図４において円形で示された地点の中で維西塔城下位方言群の地点を除いた地点について、表１に採用した分類に基づき分類記号を与えた地図を掲げる。

図 5　香格里拉方言群（1a, 1b, 1d, 1e）の音対応の類型

以上の分布を見ると、ABA 分布のように見えるのは、建塘鎮を中心とし、第１類を最も外側、第３類を最も内側とする形式である。このように考える場合、尼西郷の南西地域以南、金沙江及びその支流流域にかけて地理的に連続して位置する地域の方言が示す第３類は、ABA 分布の外側に位置すると判断する。この地域に共通する背景としては、傈僳（リス）族との雑居が進んでいる点、かつ地理的に金沙江流域という交通路でつながっている点などがあげられる。また、維西塔城下位方言群 (1c) の分布地域にも隣接している。

本稿では ABA 分布の外側にある諸方言については議論の対象としないため、これ以上深く立ち入らないが、以上に述べた背景が方言形成に与えた影響については、稿を改め議論する余地がある。

4.2　歴史的背景を考慮した ABA 分布の理解

ABA 分布を見るとき、扱う言語現象の中心はたいてい当該地域の政治的、経済的中心地である。香格里拉方言群についても例にもれず、言語現象の中心は同地域の政治的、経済的な中心である建塘鎮にあるといってよい[25]。

音特徴が ABA 分布の様相を示すとき、それが地理言語学でいう ABA 分布であると考えるには、次のような要件が必要とされると筆者は考えている。

- 音変化のそれぞれが互いに歴史言語学的に密接な関連があるという分析が可能であること
- 言語現象の中心とみなされる地域が、一定の時間、政治的、経済的な中心をなしていること
- 現象の分布地域が歴史的に見て一定の時間互いに関連していることが明らかであること

これらは、チベット文化圏について実際の言語現象にあたってみた場合、決して多くある事例とは言えない。地理言語学では分析対象の地域の歴史的背景について、何らかの文献を参照することが多い。ところがチベット文化圏については、特定の地域を除き詳細な歴史が記載されていないことが通例で、地理言語学的分析を決定づける根拠がそもそも希薄であり、より厳密な分析を経た言語事実に頼らなければならない側面がある。

逆に、歴史言語学的考察を経て、音変化の歴史あるいは相対年代の順序が明らかになる地理的に連続して分布する一連の方言区域が認められる場合、もしそれが ABA 分布のような様相を呈しているならば、これを周辺とは異なる１つの独立方言群[26]と認定する根拠にすることが可能ではないだろうか。もちろん、ABA 分布を示す方言とそうでない方言は言語地図を作成しても画一的に分かつことができず、異なる方言群が交差する地域では一見するとどちらの方言群に属するのか不明な場合がある。香格里拉市においても、詳細な音変化の分析を通して方言所属が明らかになるという例が認められる[27]。

そもそも ABA 分布は、方言群を越えて見いだせる部分も存在し、それが地理言語学的研究の１つの貢献でもある。音変化については１方言群内で閉じた、いわば保守的な特徴が相対的に多いかもしれないが、そもそも方言区画を定めるためにこの種の議論があるのではなく、方言形成の側面から見て、ある地点から同心円状に発展していると見える地域には独立した方言群の中心が存在する、と理解することが重要であるという点が強調されるべきである。

特に方言差異が激しいにもかかわらず、諸事情により「１言語」とみなされてきた言語を研究する際には、この理解が方言形成や方言区画の研究に非常に大きな影響を与えることになるといえる。

---

[25] 《中甸県誌》(1997)、《迪慶藏族自治州誌》(2001) などに記載の歴史沿革、また王恒傑 (1995) や呉光范 (2009) の記述を参照。

[26] あるいは場合によっては「独立言語」とみなすことができるかもしれない。

[27] 具体例については、鈴木 (2010, 2012b) を参照。

5　まとめ

本稿では、冒頭に次の２点を提起した。

1. 対象とする言語現象が見せる ABA 分布の外側が、当該 ABA 分布の範囲外にあること
2. ABA 分布となる現象が、ABA 分布外から受けた影響によって成立していないこと

１については、図３、図４および表１と表２の異なりから見て取れるように、明確な形でデータを示した。２については、4.2 節の議論において、同心円状の現象の中央部分が、政治的、経済的な中心地であり、ABA 分布が地理言語学的に意義のある形で成立している条件を備えていることを示した。よって、本稿で目指した議論は達成されたと考える。

本稿の分析対象とした雲南地域については、それがチベット文化圏の周縁部に位置し、かつ他民族との交流も多い点で、各地点間の方言差異も豊富に認められ、加えて一部については、音変化の歴史に他言語の深い関与が認められるという特別な状況を呈している。それゆえ、１つの地理的に連続した区域に分布する方言間に、容易に異なりを見出すことができる。音変化について ABA 分布のように見える状況が成立しているのが地図を作成することで明瞭になるというのは、非常にまれな事例であるといえるかもしれない。

現段階では、チベット系諸言語の自然村単位における方言調査が実施されているのはほぼ雲南に限られている。それゆえ、細かな言語差異が他のチベット文化圏で認められるかどうか確言はできない。しかしながら、もし他の地域で酷似する現象が認められる場合、音変化についても ABA 分布を認めることができる方言群が出てくるかもしれない。もしも同様の事例が現れたとき、本稿が１つの事例研究として参考になるだろう。

[付記]

雲南省のカムチベット語諸方言の調査に当たっては昆明市の瑪吉阿米・香格里拉藏族風情宮の関係各位の協力を得た。ここに記して感謝の意を表する。

筆者による現地調査の一部については、平成 25-28 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B)「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」（研究代表者：鈴木博之、課題番号 25770167）、平成 28 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16H02722）の補助を受けている。

参考文献

有元光彦 (2014)「音韻ルールの方言周圏論」小林 編 189-207

大西拓一郎 (2014)「言語地理学と方言周圏論、方言区画論」小林 編 145-161

小林隆 編 (2014)『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論』東京：ひつじ書房

柴田武 (1969)『言語地理学の方法』東京：筑摩書房

鈴木博之 (2005)「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1-23

—— (2007)「川西民族走廊・チベット語方言における「ぶた」を表す語」『京都大学言語学研究』第 26 号 31-57

—— (2008a)〈迪慶藏語是康巴藏語中的 “一個” 次方言嗎〉《康定民族師範高等専科學校學報》第３期 6-10

—— (2008b)「チベット語における「心」「太陽」「月」の方言地理学的分析—“香格里拉” と *sems kyi nyi zla* の対応に関連して—」『京都大学言語学研究』第 27 号 23-48

—— (2010)「カムチベット語香格里拉県浪都 [Lamdo] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』2010-35 巻１号 231-264

—— (2011)「カムチベット語嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam] 方言の文法スケッチ」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』３, 1-35

—— (2012a)「カムチベット語燕門・斯嘎[Sakar] 方言の文法スケッチ」稲垣和也編『地球研言語記述論集』４（大西正幸博士還暦記念号）, 123-158

—— (2012b)「カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴」『国立民族学博物館研究報告』2012-37 巻１号 53-90

—— (2013a)〈雲南維西藏語的 r 介音語音演變—兼談 “兒化” 與 “緊喉” 之交叉關係—〉《東方語言學》第 13 輯 20-35

—— (2013b)「カムチベット語塔城・格登 [sKobsteng] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第８号 123-161
電子版：http://hdl.handle.net/10108/75672 （2017 年４月４日アクセス）

—— (2014a)「カムチベット語小中甸・吹亞頂 [Choswateng] 方言の文法スケッチ」千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』６, 1-40
電子版：https://sites.google.com/view/kizyutuken/言語記述論集 （2017 年４月４日閲覧）

—— (2014b)〈尼汝藏語的小舌輔音與其藏文對應規律〉《東方語言學》第 14 輯 1-12

—— (2014c)〈雲南藏語土話中的特殊数詞形式：其地理分布與歷史来源〉《南開語言學刊》第２期 68-76

—— (2015a)〈建塘藏語土話研究的幾個意義〉徐建華主編《雲南藏學研究（二）》184-197

—— (2015b)〈藏語方言學研究的基礎問題〉《東方藏區諸語言研究》3-18 四川民族出版社

—— (2016a)〈藏語方言學研究與語言地圖：如何看待 “康方言”〉《民族學刊》第２期 1-13+92-94

—— (2016b)「/ɟ/が語る音変化史—カムチベット語香格里拉方言群における硬口蓋系列音素についての覚え書き—」『言語記述論集』８, 91-103
電子版：https://sites.google.com/view/kizyutuken/言語記述論集 （2017 年４月４日閲覧）

—— (2016c)〈香格里拉藏語亞浪話的鼻音系統〉《東方語言學》第 16 輯 115-123

—— (2017)〈麗江永勝県大安藏語的來歷初探：通過與納西族的接觸如何演變〉《藏學學刊》第 14 輯 250-263

西義郎 (1986)「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11 巻４号 837-900 + 1 地図

西田龍雄 (1987)「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108-169 冬樹社

Bartee, Ellen Lynn (2007) *A Grammar of Dongwang Tibetan*. Doctoral dissertation, University of California at Santa Barbara.

Ebihara, Shiho, Satoko Shirai, Keita Kurabe, Kazue Iwasa, Hiroyuki Suzuki, & Ikuko Matsuse (2016) Milk: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics III —Milk—*, 14-17. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag3_milk_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthang Tibetan of Yunnan: A preliminary report. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2, 69-92.

—— (2007) Evidentiality in Rgyalthang Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 30.2, 17-44.

Iwasa, Kazue, Satoko Shirai, Keita Kurabe, Shiho Ebihara, Hiroyuki Suzuki, & Ikuko Matsuse (2017) Wind: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics IV —Wind—* (in press)

Kurabe, Keita, Satoko Shirai, Kazue Iwasa, Shiho Ebihara, Hiroyuki Suzuki, & Ikuko Matsuse (2017a) Iron: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics V —Iron—* (in press).

—— (2017b) Means to count noun: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics VI —Means to count noun—* (in press).

Shirai, Satoko, Keita Kurabe, Kazue Iwasa, Hiroyuki Suzuki, & Shiho Ebihara (2015[2016]) Sun: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics I —Sun—*, 14-17. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag1_sun_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

Suzuki, Hiroyuki (2008) */l/ - /j/ interchange in Shangri-La Tibetan*. Paper presented at 41st International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (London)

—— (2009) Preliminary report on the linguistic geography for multicoloured Tibetan dialects of Yunnan. In Makoto Minegishi, Kingkarn Thepkanjana, Wirote Aroonmanakun, & Mitsuaki Endo (eds.) *Proceedings of the Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium*, 267-279. Fuchu: Global COE Program ‘Corpus-based Linguistics and Language Education,’ Tokyo University of Foreign Studies.

—— (2012a) Multiple usages of the verb snang in Gagatang Tibetan (Weixi, Yunnan). *Himalayan*

Linguistics 11.1, 1-16. Online: https://escholarship.org/uc/item/774554sm （accessed 12 December 2016）

—— (2012b) Tibetan *pig*s revisited: Multiple *piglet*s with a *sow* in Yunnan Tibetan and beyond. *Papers from the First International Conference on Asian Geolinguistics*, 79-88.

—— (2013) The words for ‘rain’ and ‘wind’ in Tibetic languages spoken in the Ethnic Corridor. *Papers from the First Annual Meeting of the Asian Geolinguistic Society of Japan*, 58-67.

—— (2014) Issues in the lexical complexity in Eastern Tibetic languages : from a cat’s eye. *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics* 116-125.

—— (2015) A geolinguistic description of terms for ‘sun’ in Tibetic languages in the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics I —Sun—*, 79-85. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag1_sun_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

—— (2016a) A geolinguistic description of terms for ‘rice’ in Tibetic languages of the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics II —Rice—*, 52-59. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag2_rice_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

—— (2016b) Geolinguistic analysis of ‘milk’ in Tibetic languages in the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics III —Milk—*, 30-35. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag3_milk_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

—— (2016c) In defense of prepalatal non-fricative sounds and symbols: towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10, 99-125.

—— (2017a) Geolinguistic analysis of ‘wind’ in Tibetic languages in the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics IV — Wind—* (in press)

—— (2017b) Notes on the word form for ’iron’ with a voiced initial in Tibetic languages in the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics V —Iron—* (in press)

—— (2017c) The evidential system in Zhollam Tibetan. In Lauren Gawne & Nathan W. Hill (eds.) *Evidential Systems in Tibetan Languages*. Mouton de Gruyter. (in press)

Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2016) Cultural contexts of the expansion of a Tibetan word *’bras* ‘rice’ in the easternmost Tibetosphere. In Mitsuaki Endo (ed.) *Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics*, 72-79. Online: https://publication.aa-ken.jp/papers_3IC_Asian_geolinguistics_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

Suzuki, Hiroyuki, Satoko Shirai, Keita Kurabe, Kazue Iwasa, Shiho Ebihara, & Ikuko Matsuse (2016) Rice plant: Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics II —Rice—*, 12-14. Online: https://publication.aa-ken.jp/sag2_rice_2016.pdf （accessed 1 January 2017）

Tournadre, Nicolas (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105-129. Walter de Gruyter.

Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues

and directions for research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240-263.

Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan* (with collaboration of Konchok Gyatsho and Xavier Becker).

Wang, Xiaosong (1996) Prolegomenon to Rgyalthang Tibetan phonology. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2/Fall, 55-67.

Zhang, Jichuan (1996) A Sketch of Tibetan dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects. *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115-133.

《迪慶藏族自治州誌》編纂委員會 (2001)《迪慶藏族自治州誌》昆明：雲南民族出版社

江荻 (2002)《藏語語音史研究》北京：民族出版社

金鵬　主編 (1983)《藏語簡誌》北京：民族出版社

格桑居冕 [sKal-bzang ’Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002)《藏語方言概論》北京：民族出版社

—— (2004)《實用藏文文法教程 [修訂本]》成都：四川民族出版社

陸紹尊 (1990)〈藏語中甸話的語音特點〉《語言研究》第 2 期 147-159

閔江海主編 (2001)《迪慶藏族自治州民族誌》深圳：深圳匯源彩色印刷有限公司

瞿霭堂 (1990)《藏語韻母研究》青海民族出版社

瞿霭堂、金效静 (1981)〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第 3 期 76-84

蘇郎甲楚 [bSod-nams rGya-mtsho] (2007)〈再論中甸藏語方言〉《蘇郎甲楚藏學文集》130-142 昆明：雲南民族出版社

王曉松 (2008)〈對中甸藏語方言的粗淺認識—從語音上看中甸方言的特點和規律〉《王曉松藏學文集》368-378 昆明：雲南民族出版社

《雲南省誌》編纂委員會 (1998)《雲南省誌　卷五十九　少数民族語言文字誌》昆明：雲南民族出版社

雲南省中甸県地方誌編纂委員會 (1997)《中甸県誌》昆明：雲南民族出版社

王恒傑 (1995)《迪慶藏族社會史》北京：中国藏学出版社

呉光范 (2009)《迪慶・香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索》昆明：雲南人民出版社

張濟川 (1993)〈藏語方言分類管見〉戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297-309 北京：中央民族學院出版社.

—— (2009)《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》北京：社會科學文獻出版社.

趙金燦 (2010)〈拉薩藏語與香格里拉藏語之比較〉《四川民族學院學報》第 1 期 25-28

趙金燦、李玉朋 (2014)〈建塘藏語聲調實驗〉《四川民族學院學報》第 1 期 64-68

朱曉農 (2010)《語音學》北京：商務印書館

付録：雲南省のチベット系言語の調査地点（本稿で扱う範囲に限る）

本稿図２に示される範囲における調査地点の一覧は以下のようである。本稿の地点・方言名は、若干の例外を除き、自然村名に基づいて名づけている[28]。簡便のため、以下の略号を用いる。

州級　D=迪慶州；L=麗江市；N=怒江州

県級　X=香格里拉市；W=維西県；D=徳欽県；U=玉龍県；Y=永勝県；G=貢山県

郷・自然村名の欄には、必要に応じて行政村名を（　）に入れて示す。

地点名	州	県	郷・自然村名
建塘	D	X	建塘鎮錯古龍村
霞給	D	X	建塘鎮霞給村
洛茸	D	X	建塘鎮洛茸村
尼史	D	X	建塘鎮尼史村
旺池卡	D	X	建塘鎮旺池卡村
春宗	D	X	建塘鎮春宗村
共比	D	X	建塘鎮共比村
吉迪	D	X	建塘鎮吉迪村
奶都	D	X	建塘鎮奶都村
孜尼	D	X	建塘鎮孜尼村
吉念批	D	X	小中甸鎮吉念批村
奶司	D	X	小中甸鎮奶司村
期學谷	D	X	小中甸鎮期學谷村
和平宗巴	D	X	小中甸鎮小中甸村（宗巴）
申科丁	D	X	小中甸鎮申科丁村
吹亞頂	D	X	小中甸鎮吹亞頂村
塘批	D	X	小中甸鎮塘批村
吉沙	D	X	小中甸鎮吉沙村
魯堆	D	X	虎跳峡鎮魯堆村
安南	D	X	三壩鄉安南村
尼汝	D	X	洛吉鄉尼汝村
初古	D	X	格咱鄉初古村
浪都	D	X	格咱鄉浪都村
浪都義村	D	X	格咱鄉浪都義村
普上	D	X	格咱鄉普上村

[28] 迪慶州の地名を網羅したものに呉光范 (2009) があり、以下に示す大部分は同書に含まれているが、一部漢字表記が異なるものがある。

地点名	州	県	郷・自然村名
翁上	D	X	格咱郷翁上村
阿木	D	X	格咱郷阿木村（木魯）
納格拉	D	X	格咱郷納格拉村
爭茸	D	X	格咱郷爭茸村
翁水	D	X	格咱郷翁水村
普呂	D	X	東旺郷普呂村（躍進）
習克	D	X	東旺郷習克村（中心）
爭仁	D	X	東旺郷爭仁村
新聯	D	X	東旺郷新聯村
色倉	D	X	東旺郷色倉村
新陽	D	X	尼西郷新陽村
祖莫頂	D	X	尼西郷祖莫頂村
南哈	D	X	尼西郷南哈村
開香	D	X	尼西郷開香村
布喀	D	X	尼西郷布喀村
巴拉	D	X	尼西郷巴拉村
湯堆上村	D	X	尼西郷湯堆上村
湯滿	D	X	尼西郷湯滿村
肯古	D	X	尼西郷肯古村
居佳	D	X	尼西郷居佳村（江東）
勝里	D	X	尼西郷勝里村（江東）
貴光	D	X	尼西郷貴光村（江東）
吉仁水	D	X	五境郷吉仁水村
吉仁	D	X	五境郷吉仁村
澤通	D	X	五境郷澤通村
其宗	D	W	塔城鎮説朋通村（其宗）
赤江	D	W	塔城鎮赤江村（巴珠）
白潤	D	W	塔城鎮白潤村（巴珠）
下龍農	D	W	塔城鎮下龍農村（巴珠）
英都灣	D	W	塔城鎮英都灣村
柯那	D	W	塔城鎮各洛村（柯那）
格登	D	W	塔城鎮格登村
本村	D	W	永春郷本村
嘎嘎塘	D	W	攀天閣郷勺洛村（嘎嘎塘）
工農	D	W	攀天閣郷工農村
結義	D	W	巴迪郷結義村

地点名	州	県	郷・自然村名
洛通	D	W	巴迪郷洛通村
甲功	D	D	羊拉郷甲功村
都拉頂	D	D	羊拉郷都拉頂村
古龍	D	D	奔子欄鎮古龍村
永泥	D	D	奔子欄鎮永泥村（書松）
葉日	D	D	奔子欄鎮葉日村
打撲貢	D	D	奔子欄鎮打撲貢村
亞浪	D	D	奔子欄鎮亞浪村
拖頂	D	D	拖頂郷拖頂村
相多	D	D	霞若郷相多村
月仁	D	D	霞若郷月仁村
石茸	D	D	霞若郷石茸村
茨卡通	D	D	霞若郷茨卡通村
升平	D	D	升平鎮阿墩子村
霧濃頂	D	D	升平鎮霧濃頂村
工打	D	D	升平鎮工打村（阿東）
直仁	D	D	升平鎮直仁村（阿東）
娘義	D	D	升平鎮娘義村（阿東）
子都	D	D	升平鎮子都村（阿東）
佛山	D	D	佛山郷佛山村
巴美	D	D	佛山郷巴美村
江坡	D	D	佛山郷江坡村
明永	D	D	雲嶺郷明永村
西當	D	D	雲嶺郷西當村
雨崩	D	D	雲嶺郷雨崩村
佳碧	D	D	雲嶺郷佳碧村
果念	D	D	雲嶺郷果念村
八日達	D	D	雲嶺郷八日達村
九農頂	D	D	雲嶺郷九農頂村
紅坡	D	D	雲嶺郷紅坡村
査里頂	D	D	雲嶺郷査里頂村
査里通	D	D	雲嶺郷査里通村
永支二村	D	D	雲嶺郷永支二村
永支三村	D	D	雲嶺郷永支三村
木達	D	D	燕門郷木達村
尼通	D	D	燕門郷尼通村

地点名	州	県	郷・自然村名
葉卡	D	D	燕門郷葉卡村
谷扎	D	D	燕門郷谷扎村
春多樂	D	D	燕門郷春多樂村
拖拉	D	D	燕門郷拖拉村
貢娘	D	D	燕門郷貢娘村
斯嘎	D	D	燕門郷斯嘎村
茨中	D	D	燕門郷茨中村
巴東	D	D	燕門郷巴東村
牦牛坪	L	U	大具郷雪花村
大安	L	Y	大安郷下村
丙中洛	N	G	丙中洛郷日當村
迪麻洛	N	G	棒塔郷迪麻洛村

受理日 2017 年 4 月 8 日